

刊行辞

対馬宗家文書は国史編纂委員会をはじめ、日本の対馬歴史民俗資料館・国立国会図書館・東京大学史料編纂所・慶応大学附属図書館などに散在しており、朝鮮後期対日関係史研究の基礎となる資料である。

これらの機関に所蔵されている文書に対する調査・整理の実態を見れば、本来の所蔵機関である対馬宗家文庫（対馬藩万松院所蔵文庫として現在は長崎県の対馬歴史民俗資料館に保存）の文書は1975年から1990年まで記録類をはじめとした日記類《宗家文庫史料目録》5冊（日記類、記録類Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、記録類Ⅳ、和書・漢籍）が刊行されたところである。そして東京大学史料編纂所が1994年に《宗家史料目録》として刊行した程度である。

本委員会が所蔵している対馬宗家文書は朝鮮総督府傘下の朝鮮史編修会が《朝鮮史》編纂事業とともに植民統治の資料とするために、1926年と1938年に2回にわたって購入したものであるが、朝鮮史編修会さえも、これらの文書を分析・整理することができなかった。その理由は、対馬宗家文書の成立背景・作成・体裁・種類など、文書の全体像に対する体系的な理解なしでは分析・整理が難しく、また古語・方言などの難解な文体の解読に携わる人材も不足していたためであろう。

未整理の対馬宗家文書は光復とともに本委員会で保存・管理されることになった。本委員会は1960年代末までは保存・管理にだけ力点を置いてきたが、1970年代初から本格的な整理を開始し、現在は記録類（6,592点）・古文書（11,242点）・書契（9,442点）・絵図類（1,485点）・印章（22個）などに大別して、全28,783点が確認された。

1988年本委員会の果川庁舎移転を契機に、上記史料の幅広い利用のため、本委員会は宗家文書目録集の刊行計画を策定した。この計画に従って、1990年10月には《対馬島宗家文書記録類目録集》1巻を刊行し、1991年から1994年にかけてはその後続事業として《書契目録集》Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ集を全5冊で完刊した。そして今年と来年にかけて古文書の日録集を刊行するに至った。

今回刊行する《対馬島宗家文書古文書目録集》は一枚一枚からなる

文書 11,242 点を対象にしているが、既存の対馬島宗家文書として把握していた 11,200 点に、韓国古文書に間違えて分類していた 42 点を追加したものである。対馬宗家文書の古文書は、対馬藩が江戸時代に朝鮮との通交並びに貿易を独占していただに、これと関連する文書を網羅している。釜山倭館を通じて成立っていた日朝交渉過程から生産された各種の外交文書と覚書、書簡、貿易関係証文、そして膨大な量の藩政文書が収められている。

これらの文書のなかには文書の前後が破損して誰が誰に送ったのか、あるいはいつ作成されたものなのかを知ることができず、古文書として活用しがたいものも相当数含まれている。それだけでなく《記録類》に記載された内容と重複する文書もある。しかし本委員会所蔵の古文書の最大の長所は《記録類》や《書契目録集》では見ることのできない文書がかなり多く入っているという点である。たとえば、古文書の中には、すでに法律的効力を果した原本は言うまでもなく、草案や写し（控え）も相当含まれている。草案の場合、古文書としての目的を果した場合もあるが、不発文書として終わった場合もある。したがって、草案を原本、あるいは《記録類》に書き残されている写しと綿密に対照するならば、対馬藩の政策決定過程や背景は勿論、対朝鮮交渉の意図がわかる手がかりにもなりうる。《記録類》や《書契》が、日朝通交および貿易と藩政に関してすでに実行された現実であるならば、《古文書》には、それ以前の段階における文書も含まれているため、既に刊行された目録集と併行して利用すれば、日朝交渉の実態を一層具体的かつ立体的に理解するのに助けとなるはずである。

対馬島宗家文書古文書は、あまりにもその量が膨大な上、対馬藩の対朝鮮外交並びに貿易関係文書と藩政文書とを分けることが難しい部分も多かったが、交渉対象及び場所を中心に朝鮮（倭館）・対馬藩・幕府に分けて編集しⅠ・Ⅱ集として刊行した。《対馬島宗家文書 古文書目録集》Ⅰは朝鮮（倭館）を中心に成り立っていた通交（通信使・訳官及びその他の外交使行・漂民の送還）と貿易を中心に編集されている。

《対馬島宗家文書古文書目録集》Ⅱは、対馬藩政や幕府との関係が中心となっており、対馬藩士に対する扶持・扶助関係の文書をはじめ、

倭約、送使・勤役、家中拝借、対馬島内8郷の土地およびその他領地、長崎・京都・大坂関係文書および各種の証文など、対馬藩政の姿と規模を窺い知ることのできる行政文書が大本となっている。また、幕府との関係においては、参勤・献上、および藩の財政と関連して幕府に対する財政援助を要請した文書が数量的に最も多く、あくまでも対馬藩政と幕府との関係文書が中心となっている。しかし、意外に、朝鮮との関係を知ることのできる文書も含まれている。通信使招聘をめぐる幕府に問議を行った伺書をはじめ、幕府末期、対馬海域に頻繁になっていた異国船の出現とともに、日本の開港問題が台頭する中、幕府の対外政策の変化、および対馬藩の対応を窺える古文書が相当な数ある。のみならず、明治政府初期、一時的ではあるが対馬藩が日朝交渉の事務を代行していた時期の文書の中には、漂流民送還など、朝鮮との交流内容を知りうるものも含まれている。開港を前後した時期の朝鮮と日本との関係は、善隣友好から、急に侵奪と被侵奪の関係に変化ないしは断絶したものであると理解されてきた。このような理解は、これまで開港期の日韓関係研究が不十分であったためと思われる。《対馬島宗家文書 古文書目録集》Ⅱに掲載された幕府末期および明治政府初期の文書には、対馬島を通した前近代の日朝の間接通交体制が、明治維新以降、朝鮮政府と日本外務省中心の直接通交体制に転換していく過程の中で、朝鮮との交流実態および対馬藩の政治・外交・経済的な立場を探ることのできる文書が多数含まれているので、このような文書を活用することによって、不十分であった開港期日韓関係史の研究を進捗させるのに一助となることができると考える。

一方、《対馬島宗家文書 古文書目録集》Ⅱには《対馬島宗家文書 古文書目録集》Ⅰの補遺編が収録されているが、これは1995年まで古文書の整理が継続していたため、以後整理された資料として、倭館を中心として成された交渉の内容を補充したものである。

《対馬島宗家文書 古文書目録集》Ⅰ・Ⅱの完成を契機に、対馬宗家文書の全貌を明らかにすることはもちろん、前近代および近代に移行する時期の対日関係史の研究に新たな成果が出てくることを期待してやまない。

今回の目録集刊行においては、8旬老体にもかかわらず、長期間に

わたり膨大な量の原稿整理を終えられて、去る 9 月にご逝去された林鐘海先生のご苦勞はこの上なく大きかった。また校閲を担当した李薰研究委員にも謝意を表すところである。

1996 年 11 月 30 日

国 史 編 纂 委 員 会
委員長 李 元 淳